

# アジア

## 23

### 減少する独立系華字紙と福建コネクション

しているが、少なくなりつつある独立系新聞の行方は気になるところだ。

華字紙の歴史を振り返るとなかなか興味深い。マレーシアの『星洲日報』『南洋商報』、シンガポールの『聯合早報』、香港の『星島日報』『東方日報』『明報』『大公報』『文匯報』、タイの『星暹日報』などが華字紙として思い浮かぶ。

華字紙からシンガポールの愛国華僑として有名だった胡文虎氏を連想する人も多いはずである。

「星」を名称に冠する新聞は、この胡文虎氏が「タイガバーム」などで築いた私財を注いで発刊した。戦前から戦後にかけてシンガポールからマレーシア、ミャンマー、タイ、香港大陸に及ぶ一大新聞ネットワークを築き上げた。

今も残る香港の『星島日報』『スタンダード』（英字紙）、タイの『星暹日報』、マレーシアの『星洲日報』はそのネットワークの一部だった。

一部だったと過去形にしたのは、これらのほとんどは胡ファミリイとはもう関係がなくなつたからだ。例えば香港の星島日報グループは胡氏の長女胡仙氏が経営に当たつたが実売部数の詐称事件により、99年に経営権を手放

した。

マレーシアの『星洲日報』は木材産業で財を成したマレーシアの有力華人実業家である張曉卿氏が88年に発行を引き継いだ。この張氏は続いて95年に香港の『明報』も買収、アジア有数のメディア王国を築いている。今も胡ファミリイの系統に属するのはタイの『星暹日報』しかないはずである。

新聞の買収劇で目立つのはマレーシアの華人実業家である。香港英字紙『サウス・チャイナ・モーニング・ポスト』のオーナーはマレーシア出身の郭鶴年氏のケリー・グループ。さらに邱繼炳氏のマラヤン・ユナイテッド・インダストリー（MUI）が15%強の株式を保有する。またサイノ・ランド会長の黄志祥氏も役員に名を連ねる。ロバート・ン氏の父親はシンガポールの大手企業、遠東集団を築いた黃廷芳氏である。マレー半島ゆかりの華人人脈が同紙の経営を握る。

マレーシアの華人実業家といえば、ベルジャヤ・グループを率いる陳志遠氏も欠かせない。保有していたマレーシアの英字紙『サン』と経済誌『エッジ』を02年に同じマレーシアのネクストニュースに売却し、メディア事業を

グループから切り離れた。ただ、自らネクストニュースの会長を兼任しており、個人として新聞事業との関わりを絶つたわけではない。

これまでに名前を挙げた華人実業家について、実は共通項がある。それは香港の李一族を除き、彼らの故郷、もしくは祖籍が福建省であることだ。

福建省生まれの客家、胡文虎氏の遺志が福建華僑に流れているのだろうか。書店経営者には福建省出身者が多いと聞いたことがある。福建の人は特に「文」に関心が深いのかもしれない。

過去に「橋団、橋校、橋紙」が華僑三宝と呼ばれ、特に僑紙（華字紙）は華人コミュニティの世論形成役を果たし、政治的にも大きな役割を演じてきた。華字紙は良きにつけ悪きにつけ、華人社会、政治リーダーへの影響力行使に不可欠なものであった。この認識が福建華人に特に強いのだろうか。ちなみに今の有力華字紙は米、豪、カナダなどでも印刷・発行され、グローバルな華人社会が読者層である。

『信報』の売却話で名前が挙げられた李嘉誠ファミリイの祖籍は広東省の潮州。福建省とは目と鼻の先である。

日経香港社 奥村幸広

商売柄かアジアの新聞業界の動向に目が向いてしまう。特に独自の情報発信力を持つ華字紙を注視してきた。最近、香港最大の華人財閥の総帥である李嘉誠氏の二男である李澤楷氏（PCWC会長）が香港の経済紙『信報』を買収する交渉を進めているとの報道が流れた。この原稿を書いている段階では「何も合意はない」と李会長は表明